

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00927

研究課題名（和文）中世西日本海をめぐる遠隔地間交流に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Long-distance Trades Conducted in The Medieval Western Japan Sea

研究代表者

長谷川 博史（HASEGAWA, Hiroshi）

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20263642

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、中世の西日本海について、南西諸島から北陸地方にいたる遠隔地間の交流の実像を追究した。その結果、大内一族・尼子一族・山名一族など西日本を代表する諸勢力の政治的動向が、この海域の流通構造の変化と、密接に関連していたことが、明らかになった。さらに、16世紀後半には、石見銀山から産出された銀の輸出をきっかけとして、東アジア海域の変化が西日本海域に大きな影響をおよぼしたことが、明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、列島内部の政治・経済・社会・文化を、周辺海域世界と結びつけて理解し、広域的・多角的観点から日本列島内部の歴史をとらえなおしていくことの重要性について、西日本海海域を素材として、明らかにしようとした点にあると考えられる。

本研究の社会的意義は、今日拡大を続けるグローバル社会の淵源をたどることにより、時代の転換を大局的にとらえ、一国史的な理解にとどまらない歴史の見方がなぜ重要であるのかを、議論しようとしている点にあると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated the long-distance trades conducted in western Japan Sea of the Middle Ages which covers the area from the Nansei Islands to the Hokuriku region. As a result, it became clear that the continuously changing political relationships among those major powers in West Japan, such as the Ouchi clan, the Amago clan, and the Yamana clan, were closely related to the changes in the long-distance trades conducted in this area. Furthermore, it also became clear that in the late 16th century, changes in East Asian waters had a great impact on Western Japanese society as there were a trade route of silver from the Iwami Ginzan Silver Mine.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世 西日本海 遠隔地間交流

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の主たる問題関心は、日本列島周辺海域における広域的流通構造の変化が、中世の地域社会や地域権力に、どのような影響を与えたのかという点にある。特に、中国地方における大内氏・尼子氏・毛利氏の抗争や、港町など流通の結節点の混乱、帰属関係の流動化などを、14～15世紀における西日本海を介した交流の活発化や、16世紀における石見産銀輸出を契機とする日常的交流の広域化と関連づけながら追究してきた。

しかし、こうした影響関係の要因を明確化するためには、海域に関係する各階層諸勢力の遠隔地間交流を示す断片的な情報を整理し、より全体的にとらえなおしていく必要があり、それによって中世西日本海海域の位置づけをもっと鮮明にとらえることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、中世の西日本海海域に関わった北陸から九州・東シナ海沿岸島嶼にかけての地域権力や船持衆・商職人・輸送業者等の諸勢力が、相互にどのような関係性を有し、またそれがどのように変化していったのかを、できるだけ具体的に追究することにより、当該海域の歴史的性格や時代的特徴を広域的な観点から明らかにすることを目的とした。

中世西日本海海域の物流拠点として、特に注目されるのが、益田の港湾遺跡(沖手遺跡・中須西原遺跡・中須東原遺跡)、石見銀山関連遺跡、富田川河床遺跡である。もちろん圧倒的な質と量を誇る博多出土の貿易陶磁群とは比ぶべくもないし、あくまでも現時点における考古学分野の成果によるものであるが、これらの遺跡から出土した貿易陶磁の質と量は、この海域沿岸部全体から見ても突出している。この点については、12～15世紀における出土貿易陶磁がとりわけ多い益田の港湾遺跡をどのように位置づけるべきか、あるいは、16世紀後半に大量の貿易陶磁出土が石見銀山と富田城下町に収斂されていくのはなぜか、といった課題が残されている。

本研究では、このような、西日本海海域の中心的物流拠点の形成や集約を手がかりとしながら、海域全体の構造的特徴やその変化の様相を、広域的な観点から明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

12～15世紀における石見国益田の隆盛と、16世紀後半に貿易陶磁が石見銀山と富田に集約されていく事実を手がかりとして、山陰中央部(本研究では石見・出雲・伯耆をおおむねその範囲とする)に中心的な視座を置き、以下の各地との交流関係について検討した。なお、以下はあくまでも作業上の地域区分である。

- | | |
|---------------------|------------------------|
| A 北東日本海海域・小浜との関係 | 尼子氏と武田氏・朝倉氏、および遠隔地との関係 |
| B 瀬戸内海地域・堺との関係 | 陰陽を結ぶ交流、石見銀山の住人たち |
| C 北部九州・博多との関係 | 大内氏・大友氏・宗氏と西日本海地域・石見銀山 |
| D 東シナ海・南九州・南西諸島との関係 | 島津氏・相良氏・琉球王国と西日本海地域 |
| E 但馬・因幡周辺海域との関係 | 尼子氏・毛利氏と山名氏、および遠隔地との関係 |
| F 長門北浦沿岸地域との関係 | 大内氏、および遠隔地との関係 |

以上のA～Fのそれぞれについて、各地の博物館・資料館・文化財行政担当部署の協力を得ながら、以下の手順で検討を進めた。

- 物の移動に関する新しい考古学的成果の情報を収集し、文献史料によって補足する
- 地域権力・商人・運輸業者の交流・移動に関する文献史料を収集する
- a・bを通して、それぞれの交流の範囲や相互の関係性など、交流と物流の実態を追究する。

4. 研究成果

本研究では、西日本海海域に視点を置きながら、少なくとも南西諸島から北陸に至る中世西日本各地の政治的・経済的交流の全体的な様相をとらえることをめざした。特に、広い観点から中世西日本海海域の位置づけを明らかにするために、西日本の政治的動向を周辺海域との関連性においてとらえなおすことにより、16世紀後半における西日本海海域における変動の要因を検討した。

中世後期の西日本海海域と政治的動向の相互規定性

日本海を介した活発な交流は、原始・古代よりすでに明らかな痕跡を残している。

中世にはそうした交流がさらに頻度を増して、西日本海海域において突出した位置を占めている益田地域出土の中世貿易陶磁群は、古代以来の偶発的・散発的な多彩な交流を基盤としながらも、博多とのつながりを基本に展開した比較的恒常的な大陸との交流がもたらしたものであったと考えられる。

14～15世紀になると、中世生産革命にも触発されながら、西日本海海域は畿内と西日本各地を結ぶ主要な経路としての役割を飛躍的に高めたものと思われる。若狭国産出の日引石製石造物の広範な展開や、鉄生産地が次第に中国地方に集約されて、一定程度ブランド化した鉄素材が若狭国小浜を介して畿内各地へ搬入される新たな物流の展開(長谷川博史『『たたら製鉄』の確立過

程と鉄の流通」『島根県古代文化センター研究論集』24、2020年）なども、そのことを裏づけている。

周辺海域の状況は、政治的な動向とも密接な関連性を持っていたと考えられる。とりわけ15世紀後半以降に、顕著な形で現れはじめたことも、おそらくそのような海域の変化が背景にあるものと考えられる。

文明3年(1471)に、越前国朝倉孝景が東軍方へ転じたことが、応仁・文明の乱の帰趨を分ける大きな契機となったことは、これまでもしばしば指摘されてきたことである。そのことが、日本海側(とりわけ西日本海域)を介した京都周辺の戦場への軍需物資調達経路の変化と、密接に関連していることも、よく知られている。大乘院尊尊は、文明4年8月20日に、朝倉氏の優勢により、大内氏・山名氏など西軍方の主力が日本海を介して兵糧を搬入できなくなったと証言している(『大乘院寺社雑事記』)。

このことは、あらためて、若狭国武田氏が、東軍方として小浜を抑えていたことの重要性を裏づけるものであると考えられる。少なくとも文明3年以前の大内氏・山名氏などにとって、京都への物資輸送経路として西日本海はきわめて重要であり、しかし小浜など若狭国が東軍方に抑えられていたために、もっぱら敦賀など越前国経由の経路に依拠していたこと、そして新たな戦局によりその経路すらも利用できなくなったことが、大乱全体の趨勢にも大きな影響をおよぼしたこと、などをうかがわせている。

「佐々木文書」には、出雲国守護京極持清が守護代の尼子清貞に宛てた3通の書状案について、文明4年8月に、小浜の山根彦右衛門尉の船により原本を京都へ送った際、但馬国綱懸津(兵庫県新温泉町居組)において、「敵方」に奪い取られたの裏書が記されている。この海域には、西軍山名氏配下の海辺領主の但馬塩冶氏・佐々木氏・田公氏らの本拠があり、朝倉氏の離反や京極氏の内訌など応仁・文明の乱の転換期にあたり、この海域をめぐる抗争が激しさを増していたことを示している。文明4年8月時点における、西軍方の危機感や、東軍方にとってのこの海域や若狭国・越前国の重要性を、よく示す事例であると考えられる。

それゆえに、出雲国の京極氏や後の尼子氏は、この西日本海東部海域を確保することに腐心し、一貫して若狭国武田氏との良好な関係を希求するとともに、山名氏分国(伯耆・因幡・但馬)への勢力拡大を図り、そのことは1510年代以降の尼子氏による安芸国・備後国方面に対する積極的介入の重要な背景でもあったと思われる。また、史料は限られているものの、近年明らかにされた新出文書により、尼子氏と朝倉氏の結びつきについても、その片鱗をうかがうことができるようになってきた(『国立歴史民俗博物館研究報告』212集、2018年)。それらの結びつきは、必ずしも強固な同盟関係というべきものではなく、海域に関連する重要な権益にかかわる利害の共有を前提とする連携関係であると思われる(長谷川博史『列島の戦国史3 大内氏の興亡と西日本社会』吉川弘文館、2020年)。

そのような連携は、とりわけ1530年代後半～1540年代における出雲国尼子氏の拡大において顕在化し、尼子氏の本拠富田は、経済的にも大きな発展を遂げた。そのことが、富田城跡関連遺跡・富田川河床遺跡から1540年代以降の出土貿易陶磁・威信財・京都系土師器が突如多数現れてくる、大きな要因ではないかと思われる。

海域の物流構造が、広域的な政治的動向と密接不可分であること、すなわち、西日本海域の人やモノの移動のあり方が、応仁・文明の乱をはじめ各地の政治的・軍事的動向と、相互不可分の密接な関連性を有していた可能性をうかがわせている。

16世紀後半における西日本海域変貌の要因

本研究におけるもう一つの重要な課題は、16世紀後半において、山陰地域出土の貿易陶磁が石見銀山遺跡に集約されていくことを、どのように理解すべきかという点にあった。この問題の鍵をにぎるのは、周防国大内氏、琉球王国、そして次第に崩壊しつつあった東アジア海域における旧来の外交秩序そのものであったと考えられる(長谷川博史『列島の戦国史3 大内氏の興亡と西日本社会』吉川弘文館、2020年)。

同書にも記したように、「大内氏は、崩れつつある旧来の外交秩序(冊封体制や朝鮮通交)に深く参入し、琉球王国の隆盛などによる南海路の活況や、「偽使」の常態化など、現実の交流・物流の実態にも対応しうる数少ない存在として、容易には代替しえない特異な立場を確立し、將軍や幕府体制をも凌駕する儀礼的格式を身にまといながら、一六世紀前半に最盛期を迎えた」。「大内氏と琉球王国は、それぞれ立場も存在形態も全く異なっていたものの、旧来の秩序が揺らぎ始めた時期に、それを支える過渡的な役割を果たすことを通して、いずれも一六世紀前半に最盛期を迎え、日本列島周辺の広い範囲に大きな影響をおよぼした」「しかし海域の変化の進行によって、両者の固有の役割が次第に失われていったことも、逆らうことのできない時代の流れであった」と考えられる。

大内氏時代の石見銀山の実像は、史料的制約が大きくほとんど解明できていない。しかしそのことは、大内氏自身が石見銀山の意義を深く理解し、銀山開発や銀の生産・流通管理を極力「隠密」(『相良家文書』395号)に進めようとした結果ではないかとも考えられる。寧波の乱の事後処理をめぐり明朝からきわめて厳しい眼を向けられていた大内氏にとって、中国大陸内部に地域的偏差をとめないながらも裾野の広い大きな需要が想定される銀鉱石の発見が、いかなる意味を持つものであるのか、わからなかったとは考えがたい。当時の大内氏は、銀山の所在する石見国邇摩郡と東アジアに開かれた国際貿易都市博多の両方を支配する史上唯一の存在であった。

そのため、列島内部の地域的需要が顕著には表れていない段階の16世紀前半の銀鉱石や精錬銀は、大内氏とその関係者の手を介して、博多・平戸から朝鮮半島・中国大陸・南西諸島・西海道各地へ運ばれていった可能性が高い。

しかし、銀を重要な起爆剤とする密貿易海商の活動（後倭寇）が活発化すると、大内氏の大きな影響力を支えた東アジア海域における旧来の秩序（海禁政策）は決定的に後退し、天文20年（1551）に陶隆房の挙兵によって大内義隆とともに外交儀礼にも通じた文人たちが落命し、弘治3年（1557）に大内氏が滅亡すると、とりわけ西日本海域の状況は一変していった。16世紀前半に銀を求めて日本列島近海に現れた多数の「唐船（ジャンク）」の着岸地は、ほぼ九州に集中しており、日本海沿岸にはおよんでいない。しかし、16世紀後半の西日本海域は、いつ「唐船」が着岸しても不思議ではない状況へと変容を遂げた。

永禄年間に尼子氏が御崎社に与えた権益は、島根半島周辺に「唐船」「北国舟」が来航することを自明のこととして設定されたものであり（「日御碕神社文書」）、浜田や温泉津には多数の薩摩半島周辺の船衆・町衆がほとんど常駐していた形跡がある（「島津家久上京日記」）。天正6年（1578）に、薩摩国加世田片浦の山下酒造佐が「中国銀山」に赴いた（『旧記雑録後編1』1039）ような事例は、他にも多数見られた可能性が高い。16世紀後半の西日本海域が、「唐船」のみならず、北東日本海域の「北国舟」や、南九州の船が頻繁に来航する、活気に満ちた海域へと大きな変貌を遂げていたことをうかがわせている。

この時期の石見銀山は、鉱山都市としての拡大を遂げており、列島各地はもとより大陸・欧州からも多数の人々が往来・仮寓していたことが確認されているが、中心都市として膨大な人やモノを引き寄せた要因は、東アジア海域全体の大きな変化と、大内氏の滅亡により、銀の流出経路がはるかに可変的・多元的な様相を呈するに至ったためと推定される。

西日本海沿岸地域における貿易陶磁が、中世前期以来の益田地域に加えて、1540年代から富田城下においても急増し、さらに16世紀後半に至って石見銀山遺跡へと集約されていく様相は、以上のような、日本列島周辺海域と諸勢力の政治的・軍事的動向をふまえて理解する必要がある点を、確認することができた。

琉球王国の繁栄と日本列島

本研究が琉球を対象に加えた理由は、以上のような東アジア海域全体の変動と直接的な関わりをもつ琉球王国と日本列島との関係性を明らかにする必要があると考えたためである。ただし、16世紀以前の琉球に関する文字史料は、非常に限られている。たとえば、地名起源が定かでない那覇市「若狭町」について、波之上権現社が所在し、古くから日本人が居住したともいわれる場所であるので、若狭国との関連性も想定できないわけではないが、具体的な関連性を示す史料は未見である。

そのため、手はじめとして琉球「家譜」を通覧し、日本とのつながりをうかがわせる先祖伝承を追跡した（長谷川博史『「家譜」から見た中世日本列島と琉球』2021年）。その結果、日本からの移住者を先祖とする以下のような事例を確認した。1528年生まれの秀延の父秀実が日本の僧侶、妻が「薩摩山川」荒木玄周の娘（「牛姓家譜」）であったこと、「奈良」出身の橋元休右衛門宗次や、「和泉南境」出身の佐竹藤助（道祐）が、いずれも嘉靖年間（1522～1566）に琉球へ定住し（「岑姓家譜」「庾姓家譜」）、16世紀後半には、「境」の川崎利兵衛（宗延）、「豊後」の政常、「奥州越前」の山崎二休（守三）、「京境」の町田伊兵衛（宗圓）が、琉球に来住して定着（「蒙姓家譜」「養姓家譜」「葉姓家譜」「劉姓家譜」）したほか、1605年には、「京界」の石橋市右衛門（道金）が来住したこと（「孫姓家譜」）等々である（長谷川博史「琉球と石見銀山と十六世紀の世界」『本郷』149、2020年）。年代順に並べてみると、17世紀以降の日本からの来琉者はほぼ南九州の出身等に限られてゆき、16世紀に遡るこれらの家譜伝承が単なる後世の創作ではないこともうかがわせている。その一方で、今回通覧した膨大な「家譜」のなかにあって、日本からの来琉者を祖先と記したものがきわめて少ないことは、やはり注目しておくべき事実と思われる。

琉球は古くから日本列島や大陸との緊密な交流関係を基盤としてきたのであり、とりわけ15世紀後半以降の琉球には多数の日本僧・日本商人が来住し、さかんな交流・交易活動を展開していたと考えられている。にもかかわらず、「家譜」に残された中世日本列島との交流の痕跡は、あまりにも少ないと感じられる。そのことにどのような政治的・文化的背景（政策的な規制や身分的な偏差、あるいは先祖や血縁関係に対する観念など）があるのかについては、今後の重要な検討課題と言わなければならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川博史	4. 巻 24
2. 論文標題 「たたら製鉄」の確立過程と鉄の流通	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鳥根県古代文化センター研究論集	6. 最初と最後の頁 243-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川博史	4. 巻 -
2. 論文標題 戦乱の時代の港町・鞆の浦 ～足利義昭と鞆の浦～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福山市鞆の浦歴史民俗資料館『鞆幕府 将軍 足利義昭 ～瀬戸内・海城・水軍～』	6. 最初と最後の頁 96-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長谷川博史
2. 発表標題 出雲国の戦国争乱と中世文書
3. 学会等名 日本古文書学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大内氏歴史文化研究会、伊藤幸司、真木隆行・和田秀作・川岡勉・山田貴司・長谷川博史・中司健一・佐伯弘次 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 418
3. 書名 室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる	

1. 著者名 長谷川 博史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 246
3. 書名 大内氏の興亡と西日本社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------